

個人的に総括・伊香保大会

森下 知昭

376-0013 群馬県桐生市広沢町 6 丁目 388 番地

Tel 0277-53-0979

E-mail m-chiaki@nifty.com

- そもそも大会のコンセプトは？
- もう一つの「画期的な試み」は？
- 前例のレスペクトと創造性について
- 夏の大会開催地一覧
- 同じ大会はない
- ノーベル賞に思う〈評価論〉
- 大会に必要なものはなにか
- ブラボー券
 - 資料係(担当)
 - 何を評価するのか？
 - もう一つの伏線
 - 大会参加費をどう使うか？
 - 全員参加のドッキリ企画？
 - 金銭的な裏づけは？
 - ダービーの成立
 - 資料の評価にも
 - ブラボー券の性格は
- その他 web ページの開設について
- ライブ中継について
- エプロンの作成
- 大会記念品について

2016/9/10 の伊香保大会総括での資料をもとに、作成したものです。

◎ そもそも大会のコンセプトは？

〈何のために大会をやるのか？〉と言うのは、サークルの中で最初から話題になっていた。これは何回話し合っても明確に出てこなかった。とにかく〈やりたい〉と言う意見に対して、周りが納得するために出てきたのが、〈そもそも集まることに意義があるのではないか？その点、伊香保はさまざまな宿泊形態を選べるから良いのだと考えよう〉だった。

前年が東京下町大会であり、宿泊は各自で予約する大会であった。プライベートな時間を確保できる利点はある。一方、朝から夜中まで討議を続けられる「合宿研究会」の良さは失われてしまう。伊香保ならばホテルに泊まって「合宿研究会」の良さを持ちつつも、周辺の格安ホテルを利用することもできるので、〈さまざまな宿泊形態を選べるのを売りにしよう〉と考えた。

だから、大会が決まってから立ち上げた web ページ上では他の宿泊場所についても案内をしてきた。

これを実験として見るのなら、その結果は？

参加者約 340 人。会場ホテルに宿泊する人は約 200 人。実行委員会を通さずに直接ホテルに申し込んだ人や通いだった人がも 20~30 人ぐらい？他のホテルに宿泊した人は約 100 人だった。

この数値が今後、大会をやろうとする人に意味のある数値になるのならうれしい。

◎ もう一つの「画期的な試み」は？

大会が決まってから、日程変更を『研究会ニュース』に載せた時、一緒に大会スタッフの募集をした。

進んで連絡を取りスタッフを引き受けてくれた人もいた。でも、話の中で「手伝ってくれる？」「うん、いいよ」でスタッフになる人もいたのではないかと思っている。

だから、「実行委員会」と言う組織は30～40人と膨らんだが、多くは大会前日からの手伝いになる。本当に準備に関わる実行委員は地元のサークルに限られてしまう。

ボクの中では〈中心となるサークルと近隣のサークルが一緒になってやるのが良い〉と思っている。前日からの手伝いと言うのは、それこそ参加者に声をかければ手伝ってくれる人もいるだろう。

実行委員会と言いながらも「主催者意識のある者」と「そうでない者」とに分かれてきた。「主催者意識のある者」は本当に少数であった。だから、意見も言いやすかったし、創造性も発揮しやすかったのだろう。

ボクが他の大会の手伝いをするとしても、結局は地元のサークルがやりたいことを手伝うつもりで協力する。大切なのは地元のサークルではないか？ いったいどういう組織を作って運営をして行くつもりだったのか今だもって共有できていない。

結果として、公募制は失敗だったと思っている。現実的には一番大変な部分＝準備の多くは渡良瀬サークルに丸投げだった。(高崎サークルは準備会にはほとんど来ていない)

大会は〈中心となるサークルと近隣のサークルが一緒になってやるのが良い〉と思っている。

ただ、〈実行委員を水増しする?〉手法はボクも使わせてもらった。大会終了後に残った資料の処理として、〈あなたも資料係をしませんか?今からできることは、①残った資料を山分けする。サークルで配布しても各自で処分しても良い。②資料係として全資料をPDF化したDVDをもらえます〉と言う企画をした。新たに十数人の協力があり、残った資料の片づけができた。(この全資料のPDF化計画もいろいろ気にする課題があるとは思う。でも、実行委員と限定することで全部の資料を見られるようにするのはギリギリセーフかな?と行ってやったわけである)

◎ 前例のリスペクトと創造性について

大会前年の12月、仮説社訪問の時に、竹内さんより「現実的には無理だけど第1回大会のつもりでやってみて」と言われた。「第～回大会」と名乗ると、前例を引き継ぐ意識が強くなってしまう。それも大切ではあるが、〈自分達で考えて創造性を発揮して欲しい〉と言う意味だと思った。

今年の7/31 渡良瀬 ML2386 発言より

仮説実験授業はある程度の意欲を持った教師なら・・・授業書を印刷したり、実験道具を用意したり、授業運営法を学んで進められる人なら、ある程度の成功・・・8～9割の児童生徒の歓迎・・・を保証するものです。だから、授業を科学に高めたわけです。

ならば、大会もある程度の意欲をもった人なら、ある程度の成功ができるものにしないでならない。(と勝手に思っています)

運営する上で、〈あの人にまかせておけば、無難に安心〉と言う仕事があります。でも、それでは次に引き継ぐことにならないと思うのです。

極端に言えば、1日目2日目3日目に当たり前のように板倉さんに話をさせるのが良いとは限りません。もし、来られない場合にはその時間をどう運営するか考えておいても無駄にはならないと思います。

1日目に「会代表あいさつ」があるのは仕方ないとしても、2日目・3日目の運営は考えられるのではないのでしょうか？

総会の議長で「渡辺さんと平林さんの元気な姿が見られて良かった」という意見があったのをわかっているけど、次に引き継ぐことを考えていいと思う。

「事務局からの会計報告」は犬塚さんでなければならぬだろうけど、拳手を数える山田さんや分科会設定の中さん・大久保さんなどは、固定してしまうことが良いとは思えない。それこそ、「ある程度の成功」で良いのだから、冒険したって良いでしょう？

水上大会の時は、律義に人数を数えてしまったけど、〈山田さんと2人で数える〉という形式にすれば、ちょうど学ぶ機会にもなった。

目立たないけど、分科会設定がかなり引き継いでいない。一人は別の人を担当にして、仕事のノウハウを広げた方が良い。

その人が「地元」とこだわると、引き継ぐことにならないかもしれないので、もっと広く考えると、歴代大会責任者に広げて良いのではないのでしょうか？

宮城大会の伊勢さん、勝浦大会の早川さん、山口大会の大黒さん、東京大会の福島さんなど、ずっと年齢層が若くなります。

それこそ、〈大会委員長は翌年の議長になる〉ぐらいの慣例を作っても良いのでは？（ああ、そうすると今年の福島さんのように2年続けて立候補ができなくなるか？）

「思ったよりできなかつた」と言うのがボクの実感です。〈無難に安心〉の部分が多かつた。

夏の大会はどうせ成功するに決まっている。それは最初から参加者が主体的な意識でいるからだ。入門講座の方が難しい。大会終了後、品川さんは〈地元振興のためにやった〉と語った。ならば、本来は入門講座をやった方が良かったと思っている。

◎ 夏の大会開催地一覧

- | | | | |
|------|-----------|------|-----------|
| 1967 | 兵庫 (有馬温泉) | 93 | 京都 |
| 68 | 愛知 (名古屋) | 94 | 山口 (湯田温泉) |
| 69 | 岩手 (盛岡) | 95 | 福井 (芦原温泉) |
| 70 | 徳島 | 96 | 山形 (天堂温泉) |
| 71 | 京都 | 97 | 愛知 (三谷温泉) |
| 72 | 神奈川 (箱根) | 98 | 高知 (高知) |
| 73 | 北海道 (小樽) | 99 | 北海道 (帯広) |
| 74 | 広島 (帝釈峡) | 2000 | 熊本 (阿蘇) |
| 75 | 愛知 (蒲郡) | 01 | 三重 (鳥羽) |
| 76 | 大分 (湯布院) | 02 | 鳥取 (皆生温泉) |
| 77 | 長野 (志賀高原) | 03 | 広島 (宮島口) |
| 78 | 島根 (大山) | 04 | 滋賀 (長浜) |
| 79 | 福島 (猪苗代) | 05 | 佐賀 (唐津) |
| 80 | 静岡 (浜名湖) | 06 | 香川 (琴平) |
| 81 | 北海道 (洞爺湖) | 07 | 北海道 (茨戸) |
| 82 | 京都 (天橋立) | 08 | 京都 (丹後) |
| 83 | 和歌山 (白浜) | 09 | 岩手 (鶯宿) |
| 84 | 鹿児島 (霧島) | 10 | 石川 (能登) |
| 85 | 新潟 (大湯温泉) | 11 | 福岡 (宗像) |
| 86 | 高知 (足摺岬) | 12 | 宮城 (松島) |
| 87 | 石川 (山中温泉) | 13 | 千葉 (勝浦) |
| 88 | 広島 (鞆の浦) | 14 | 山口 (湯田温泉) |
| 89 | 岩手 (繫温泉) | 15 | 東京 (北とぴあ) |
| 90 | 福岡 (原鶴温泉) | 16 | 群馬 (伊香保) |
| 91 | 北海道 (定山溪) | 17 | 長崎 (長崎) |
| 92 | 長野 (蓼科高原) | | |

おお、伊香保は第 50 回大会だったのか！

◎ 同じ大会はない

50年も歴史があれば、大会も変わってくる。

初期は手書きの資料だから資料数も限定されただろう。ワープロ・パソコンの普及が資料数の増大になる。1984年頃、仮説社でワープロ専用機オアシスを購入して、霧島大会で紹介する。会員の中でもオアシスを購入するようになる。今では手書きの資料をほとんど見ない。

大会記念Tシャツはいつからだろう？心円さんのところではTシャツが話題になったことがない。だから、1985年まではなかったと思う。それまで大会スタッフは名札の色で区別をしていた。でも、90年の腹鶴大会でボクはTシャツをもらったので、その頃にはTシャツ文化があったと思う。また、Tシャツのデザインも年々洗練されてくる。非常におしゃれなものになってきていた。

お土産は？

84年の霧島大会では〈桜島の火山灰が磁石に付くのでそのままお土産になる〉と言うものだった。93年の京都大会では、平尾さんが水分子模型を手作りで入れた話を聞いた。2008年の丹後大会は実用一辺倒でボールペンを入れた。東京大会では教材とのしても使えるマスキングテープだ。それぞれに知恵を働かせていた。

こういう流れが良いか悪いかは別として、主催する者は〈自分だったらどうしようか？〉と考えるのではないだろうか。

資料受け付け・資料一覧についてもそうだ。

水上の冬の大会が2003年。その時はその場で入力していた。その後、事前受け付けをかなり呼びかけるようになる。エクセルファイルの添付から、読み取り統合するマクロを作成する人も出てくる。数年引き継いだかと思ったら、google フォームでの受け付け。また資料一覧の作成も村西さんが専用ソフトを開発する。

そういった先人の業績の肩の上に乗って次の大会が開催されているのも事実だ。年々レベルが上がっているのだ。同じ大会はない。大会だってどんどん変わっている。それについていけているのだろうか？

ボクは2005年の唐津の大会の時に、〈ああ、大会のレベルは上がっているなあ。2003年の水上大会でやった程度ではダメなんだなあ〉と感じた。唐津では本部を売り場の前のロビーに設置した。それまでのどこかの部屋に割り振った本部でなく、開かれたものだった。(今回の本部ラウンジ化の意識のキッカケになっていた) その他、大会の運営など水上大会以上の良さを感じた。〈冬の大会の勢いで夏の大会も〉と考えた時に、自分には大会をより上乗せをできるだけの自信がなかった。

今回の大会ではインターネットを利用したいろいろな事業についても新しいさまざまな試みがあった。(受け付け資料名や売り場の事前公開。全体会のライブ中継。大会終了後のまとめの掲示など) その中で google フォームを利用した事前の資料受け付けもした。

これらはみな、東京大会の協力をすることで学習して考えたことだ。資料受け付けのロビーで google フォーム

の設定方法を竹田かずきさんに教わった。無料ホームページサービスは東京大会と同じ fc2 を利用した。facebook も団体で登録できることは初めてやってみたことだ。

変わって行く大会運営に対して、昔の自分では対応できないと思ったからだ。そうでもしないと、大会が引き継げないと感じていた。水上大会を経験することで、他の大会に参加しても、主催者の働きや工夫をいろいろと感じるようになった。

大会をやろうと思っていたのなら、前々から〈自分だったら～したい〉という思いを持っていて欲しかった。相変わらず、「パソコンが苦手なんだよ」と言って、資料の登録もしなかったぐらいだ。〈会を企画すれば、後は他のメンバーが良いようにしてくれる〉・・・そんな思いだったのではないか？

もともと水上大会だって、大会を迎えるまでの計画性やその後の処理については泥縄だった。いっしょにやっていて、「う～ん、品川さんにはこういう仕事は向かないなあ」と実感した。今回、「再び群馬で大会をしたい」という品川さんの思いに乗れなかった理由の一つである。

◎ ノーベル賞に思う〈評価論〉

ノーベル賞の受賞では1つの賞に3人までと言う制約がある。ただし、3つの内容にそれぞれ与えるわけではない。一つの業績に関して関係する3人に与えるわけである。〈理論的に予言した人・実証した人・開発した人〉がそれぞれ評価を受けて3人同時に受賞することも珍しくない。湯川秀樹は中間子の理論的な予言であり、それを実証したわけではない。また、下村脩は師から〈クラゲの研究〉の課題を与えられ、発光タンパク質の発見をしたことで受賞をする。それぞれに良い仕事をしており、それぞれに評価を受けている。

さて、仮説の大会だって同じだ。間違いなく〈伊香保で大会をやるうとして働き続けた人物〉として品川さんは評価されて良い。それを低めるつもりはない。そしてそれと同時に、〈現実の伊香保大会の準備・運営について仕事をした人〉もいるわけである。それは同等に評価されるべき立場だと思う。

だから、伊香保大会の最終的な責任（お金の使い方？）についても品川さんが一人で決めるのは変だと思っている。現実の伊香保大会の準備・運営に関して〈品川さんが中心となって進めていた〉のなら、〈一人で最終責任を取る〉とか言うような親分的な態度も許されたかもしれない。しかし、そうではなかったのだから、お金の使い方は実行委員会（＝事実上の渡良瀬サークル）が納得できるようにしてもらいたい。

◎ 大会に必要なものは何か

レベルアップしている良い例が「保育」「サマースクール」だ。これがなければ、本当に夏の大会は〈中心となるサークルと近隣のサークルの協力〉で実施しやすくなる。

昔は子どもは相手にしていません。勝手にエレベーターで遊んでいるだけでした。

いくら主催者は第1回のつもりでも、参加者は一度でも経験すればその時と比較してしまう。その結果、大会のレベルはどんどん上がってしまう。〈これで良いだろう〉と言うのは、主催者ではなく、参加者が決めることだ。

そう言った要望に応えようとするからどんどん予算が膨らんでしまう。会計グラフを見ると、本当に必要な会場費は半額（5千円）もあれば済んでしまうのだ。

他の研究団体により参加費が5～6千円のところがあるのもうなづける。会場費+事務費でまかなえるのだ。それ以外の物はすべてサービス。本当に必要かどうかを考えていい。

もともと今回の大会でも、当初、「ハイブリッドの大会を目玉にする」と盛り上がっていた時、「それは高い参加費で運営することになる」とボクは言った。（渡良瀬 ML 2015/7/22、2356の発言）

そんなことは大会運営者が考えなくても、参加者が勝手にもうやっていることです。大きなお世話です。

普通のホテルでは、宿泊してくれるから会場を貸してくれるのです。つまり、通常の「宿泊費」と言うのは、暗黙のうちに「宿泊費+会場費」を払っているのです。

ホテルに宿泊しないで外部に泊まるということは、会場費を払っていません。宿泊している人が負担をしているのです。

そのことはもう 20 年近く前から問題になっていました。〈大会参加者は多いのに宿泊者が少ないので運営が大変になった〉と言うのです。

こういった問題は今まで経済的に解決しようとしてきました。つまり、「大会参加費」は「大会参加費+会場費」として上乗せしたのです。早割りがあるのも、ホテルとしては部屋が空くよ
うなら他へ貸し出したいから、人数を押さえるためです。

今回の天坊は栗原さんの情報によれば、〈会場費さえ払ってくれば、宿泊をしなくても大丈夫〉といます。

だから、気になっているのは、〈必要な部屋をまるまる押さえた場合にいくら掛かるのか?〉です。それが「大会参加費」に関係するのです。

「実験を提案します」と言うけど、言い方を変えれば、「高い参加費で運営します」と宣言した方が分かりやすいです。結局は安い大会参加費では実験できませんよ。

この時の品川さんの答えがこれだ。

森下さんから参加費はいくらで考えているのかという質問がありました。

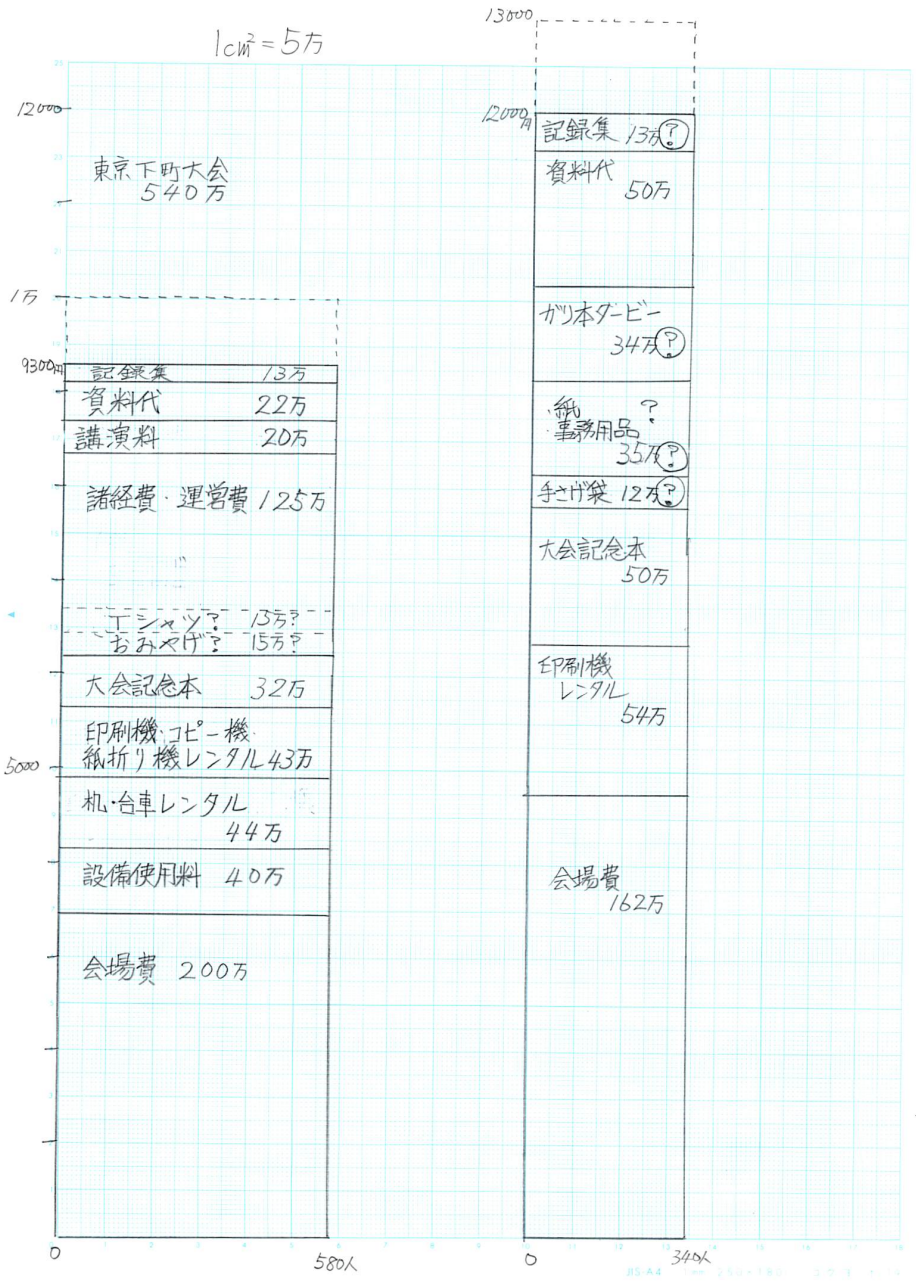
今回の大会立候補の中では参加費をいくらにするのかを発表するつもりはありません。大会立候補の中で参加費について触れているのはほとんどないと思います。私の記憶では、基本的に

大会が決まってその大会の実行委員会が実際に運営するときに初めて問題になると思っています。そのホテルでの宿泊の仕方やどんな会にするのかを考えて、そのホテルとの交渉で決まってくるのだと思います。ただ今までの大会を見ると、それぞれの事情で大会の参加費は決めてきていると思います。

(2015/7/26、2377 の発言)

でも、おもしろかったのは、群馬の対立候補に出た大阪は「参加費を5千円でやります」と言っていたことです。やっぱり、気にしている人には見えている問題なのだと思う。

結果としてやっぱり参加費はもっと高くする必要があったということです。〈やってみてわかったこと〉かもしれないけど、本当にそうだったのだろうか？ 〈高くしなければだめだろう〉という意識と〈従来通りの価格設定で何とかなるだろう〉という意識、〈安い方がいいよ〉と意識、最初に何を思っていたかによって違うだろう。



◎ ブラボー券 ◎

『仮説実験授業研究会ニュース 2017年3月号』に目次伯光さんの「ボクが見つけた/たくさんの”シメタ”前編」を読みました。内容は冬の東京大会で行われた王子札に関する意見です。（「王子札」とは大会期間中売り場で利用可能な金券のことです）これとすごく似た試みを伊香保大会ではブラボー券としてやっていました。

しかし、これは〈売り場の活性〉と言う視点ではなく、〈よい仕事をした人に対する評価について〉という視点からやった試みであり、関係して〈参加費の還元について〉〈資料の評価について〉も考えて行ったことです。

大会期間中も〈これはおもしろい試みだ〉〈イイネ〉と言う評価をもらった。もちろん、〈ちょっと・・・〉という考えもあっただろう。今回の王子札が伊香保大会のブラボー券の流れなのか？それとも前年の徳島大会の流れなのか？それはわからないが、いずれにしても記録に残しておくことが「後世の研究家が参考になる記録集」になると思う。

そもそもの始まりは、〈資料代をどうするか？〉の問題意識から始まった。 昨年の正月に「大会で気にしていること」と言う資料を書き、1月第2土曜日の「雪中行軍の会」で発表した。この資料はそのまま〈これをたたき台にして大会の大会基本構想を作って欲しい〉と品川さんに渡した。この中に資料係して最初から気にしていたことが書かれています。自分の資料を引用します。

● 資料係(担当)

- ・ 資料代についての基本的な考え方は?水上大会では「原稿料」の考え方。ページあたりの原稿料 + 紙代だった。東京大会では当初「出さない」方針だった。結局は一律同一金額で払った。
- ・ 資料受け付けについては東京大会をならいたい。Web 上で受け付け。
- ・ 受け付け完了が web 上で確認できると安心。ある程度の情報をあげて毎日更新?
- ・ 分科会係との連携がある。希望分科会を聞いてあとは分科会係に丸投げ?

これをもとにいろいろな構想が進んで行きました。その後のメーリングリストで自分が書いた内容を引用します。

1/30 [ikaho_jikkouin:0395] 【資料代に関する哲学】

資料代に関する哲学です。これも資料係が勝手に決めることでないので、意見が聞きたいです。

前提として、大会運営をすることで赤字にしたくはない。冬の大会をする時に、「イザとなったら品川さんが定期預金を一つ解約すればいいよ」と言いました。(確かに知らない人が聞けば、怖いことをいう人達ですね)

でも、本気で赤字を出そうとは思っていません。大將がそれだけの覚悟があれば他の者はそれだけ安心して仕事ができるから、言っただけです。

今回、本気で品川さんが解約する気なら止めます。そんな前例を作りたくないです。

だからと言って大幅黒字にしてもいけない。そのための資料代です。ですから、〈大会運営の中で残金の見込みがみついたら資料代に持って行く〉としていました。ところが、最近ではその

黒字の分を仮説会館等への寄付(?)に回すと言う選択肢も出てきました。

(刈谷の冬の大会では直前までそのように考えていたようです。結局は資料代がでましたが)

今回、干台さんの「優秀資料の選定と賞の発行」を見て、新潟大会を思い出しました。あの時は干台さんと塩野広次さんが資料係として全資料の中から優秀賞を出しました。賞金も多額でした。その時に評価されたのが愛知の宮地さんです。細胞に関する授業プラン〈生物と細胞〉が評価されました。宮地さんの現在の活躍もここがスタートでした。これは後に第1回板倉賞を受賞したのが犬塚さんと宮地さんで、その時に宮地さん自身が言っていたことです。「あの時の3万円(?)がうれしかった。研究資金として使えたので授業書が完成した。この板倉賞の副賞の10万円では使い道がない」というようなことを言っていたと覚えています。

しかし、その後優秀賞を出すことがないのはなぜか?干台さん・塩野さんに言わせれば、「3日間ずっと資料を読み、選定する責任感の大きさが重くて大変」だからでしょう。

その点、〈ページ数×部数〉で資料代を選出する方が楽です。(官僚的ですね)

冬の水上大会では、〈印刷部数より1ページの原稿を作る労力が大変なんだ〉と1ページあたりの単価を上げて計算しました。(しかもあの時は明細入りの資料代でした。あんな試みも他では見なかったです)

ながながと書きましたが、資料受け付けの項目に「ページ数」「部数」があるのは資料代算出のためです。「一律に1000円」となれば、この項目は要りません。「ページ数」は内容をイ

メージする項目として役立つから残しておいても良いかもしれません)

あと、やってみたい資料代は遠隔地手当ですね。(遠くの人に多くやる)と言う発想です。

今回は干台さんがやる気まんまんなので、面白いことができそうです。お金がからむことなので気にしています。

1/30 [ikaho jikkouin:0397] Re: 【資料代に関する哲学】
資料に関しては最後の「廃棄」も気にしています。

集まった資料は〈ご自由にお持ち下さい〉としても、結局は最後に捨ててしまうわけです。

これ、実に忍びない。自分のが捨てられるのも、人のを捨てるのも気持ち良いものでない。

そこで、〈全国のサークルに勝手に送り付ける〉と言うのも考えたことがあります。

これをするにも送料がかかるし、〈大会を意識して書いたのであり、勝手に全国に送って欲しくない)と思う人もいます。また、資料は全国大会に参加したから入手できるものであり、参加していない人に配布されるのも変だ。

「全体配布は～～部、分科会用資料は～部用意して下さい」と言うからそれだけ印刷して持って行ったのに、「残りは持ち帰って下さい」と言われるのも、何か変。帰りは荷物を軽くしたい。

~~~~~

## ● 何を評価するのか？

問題意識を提出したことで、サークルでもいろいろな考えが出た。その中で教えてもらったのが、「楽知ん研究

所」の投げ銭システムだった。最初に全員に種銭を渡す。発表に応じて、投げ銭で評価するのである。

参考になったのは、〈資料に対する評価でなく、人物に対する評価ができる考え〉であった。研究会の中で紙ベースの資料を発表する人は貴重です。話題のきっかけを作っています。だから、評価されるのはわかります。しかし、同時にその検討会の中でいっぱい意見をいう人や新たな問題に気づかせてくれる人も貴重です。いい仕事をしているわけです。この人達への評価はどうするか？そこで、「あんた良いことを言うね」と投げ銭です。互いに評価し合うのがおもしろかった。

最初の全体会で資料代の主旨を話し、「〈資料代が安い〉とは言わせない。自分で稼げ！」と言ったらブーイングの嵐になることも予想された。

同時にむき出しのお金をやり取りする心理的な抵抗もある。

第一、初めての試みに参加者がそう言った投げ銭ができるだろうか？投げ銭ができなければ、そのお金は自分自身への投げ銭となる。

いろいろな不安があるまま、棚上げとした。

この時、冬の徳島大会で「藩札？」が発行され、大会期間中売り場でのみ有効な券があったことは facebook で知った。これもおもしろかった。売り場振興＝イタクラ係数向上に役立つと考えられる。

## ● もう一つの伏線

売り場と言えば、担当の峯岸さんが、〈ガリ本ダービーをやりたい〉と言い始めたのもブラボー券に関係している。

実行委員会の中では〈ガリ本ダービーが最近行われていないのは、それだけガリ本に対する需要が減ってきているからではないか？もしそうならば、企画しても成立しないのではないかと〉懐疑的な意見が多かった。それに対して峯岸さんは〈ガリ本ダービーが最近行われていないのは、500円と言う価格設定が安いからエントリーが減った〉と考えた。だから、〈価格設定は1千円にする。500円は従来通り実行委員会から負担して、参加者も500円を払うシステムにすれば成功する〉と考えた。ここで、実行委員会から500円負担と言うのは、〈それだけの予算がまわせないだろう〉と考えたからである。

懐疑的な意見が多い中、ボクは一貫して、「やりたいようにやらせてやれよ。中途半端に500円と言わず、本部から1千円を負担しろよ」と言い続けた。

## ● 大会参加費をどう使うか？

大会参加費として1万3千円を集めている。他の教育団体の全国大会では参加費が5千円程度であった。つまり、会場費や事務費だけで全国大会が成立するのなら、約半分で間に合うのだろう。そうすると、残りのお金はすべて実行委員会の黒字になる。儲けるつもりがないの

だから、いかに参加者へ還元するかを考える。それが、一つは資料代であり、ガリ本ダービーになるのだろう。

〈参加費をどう使うか?〉の問題意識は3月ぐらいに大会記念ユニフォームの話題から考えるようになった。東京下町大会を経験して、夏にTシャツは3日間使えないと感じた。他に使えるものとしてエプロンを考えた。デザイン等で盛り上がっている時に、〈参加費が実行委員のユニフォームに使われるのは問題ではないか?〉と新潟の北村さんより意見があった。言われて見ればそうである。でも、このあたりは微妙な線かもしれない。代表が〈いや、伊香保大会ではユニフォームにも使う〉と考えれば、それはそれでありの世界とも思える。

結局、代表は何も方針を示さなかったので、エプロン作成は川島さんを中心とする科学の碑サークルの独立事業となった。大会実行委員会とは別にベンチャー企業の感覚であった。

このことから、〈大会参加費は参加者にいかに還元するか?〉という意識は強く持つようになった。

今までの資料代のシステムは一度大会実行委員会に預けたお金を実行委員会で再配分をしてもらうシステムである。それは、銀行にお金を預けることでお金の投資先は銀行に考えてもらうことに似ている。

それに対して投げ銭システムは参加者が互いに評価をして配分することになる。これは応援したい企業の株式

を直接買うことに似ている。これは評価論として非常に健全ではないだろうか？もし、誰にも投げなくても問題ない。そのお金は参加費の還元になるのだから、それはそれで良い。

資料代は資料を書いてきた人だけの還元になる。しかし、ガリ本ダービーは参加者全員への還元になる。同様に全員に還元するものとして、お土産や大会記念本も（お土産や大会記念本についても関係した話があるが、それはまた別の話題として・・・）

## ● 全員参加のドッキリ企画？

個人的に投げ銭システムは〈やりたいなあ〉とずっと気にしていた。せつかく資料を発表しても、資料代がもらえないとなると気にしてしまう。

だから、従来型の資料代も用意しておくが、それはあらかじめ知らせない。最初の全体会で、「資料代は投げ銭システムです。せいぜい稼いで下さい」と言い、会場全体のブーイングをあびる。文句が殺到するだろう。そして、2日目の全体会。「予算に余裕ができたので、資料を書ってくれた人には〈資料の送料代〉としていくらかお渡しできそうです。会場をでたら〈送料代〉をもらって下さい」と言う。そこで〈なあんだ〉と歓声。この落差がたまらない。大会参加者全員参加のドッキリ企画である。

投げ銭がスムーズに進められるように、大会前日の全国委員会の中で企画を知ってもらい、その場にいた人に

はサクラとして、協力してもらおうようにすれば、楽しいだろうなあ・・・と想像していた。

実際のどれだけ投げ銭ができるのだろうか？小さな会ではあったけど、6月の心円祭では実際に投げ銭をやってもらった。参加者に500円分の種銭を渡し、落語や企画物に渡してもらったのだ。やっぱりもらえるとうれしい。

ボクはこの頃まではまだまだやる気でいた。

### ● 金銭的な裏づけは？

ボクが目をつけていたのが、ガリ本ダービーだった。〈企画が成功すればシメタ。もし、企画が成功しなければ、一人1千円分の予算が使えるのでシメタ〉と考えていた。

「ガリ本ダービーを企画したのですが、今回は成立しなかったので、その分のお金を返金します。ですから、これで投げ銭をやってみませんか？」と提案するつもりでいた。このお金は売場の品物の購入に使われてもよし、それこそ何人かでも投げ銭に使ってもらえればよい。それぐらいのつもりで考えていた。

### ● ダービーの成立

ところが、ガリ本ダービーが成立する見込みになった。このままでは投げ銭が成立しない。でも、捨てきれない。ガリ本ダービーの実施方法を聞いて行く中で、〈自由に本



を取る形式でなく、クーポン券のように交換する形式だ)と知った。

もし、欲しい本がなかったらどうする? 「使わない自由がある」と言う。

そこで、秘かな企みとして、〈ガリ本クーポン券を何にでも使える金券との引き換え所を設置しよう〉と考えた。後で実行委員会が現金化すればよい。そこで、〈売り場でも使え、投げ銭にも使える金券=後のブラボー券の構想)がまとまってきた。準備は進めていても、公には口にしていなかった。大会1週間前の準備会の時にも黙っていた。

## ● 資料の評価にも

ある程度の数を発行したかったので資料代の一部として入れた。

資料代の算出については、最後までもめた。〈全体としていくらまで資料代で出せるのか)の枠が当初よりも減ってしまったからだ。いざ、大会が始まると思っていたよりもいろいろと出費が多くなってしまったのだろう。

でも、大枠として、

紙代+遠隔地手当+ボーナス

で算出した。資料代軽減のため、上限も設けてしまった。遠隔地手当は本州以外の人に付けた。また、ボーナスは全部の資料を読んで、〈オススメ)と思えたものに独断と偏見で付けた。このボーナスとしてブラボー券を入れた。

単なる金券のつもりでいたけれど、いざ使うとなると何か一言書きたくなった。ふだんなかなか言えなかったことをメッセージとして書きこんで渡すようになった。これは最初に思っていなかった使い方だった。

振り返って見ると、もっと最初からアピールすれば良かったと思っている。売り場の片隅には〈ガリ本クーポン券とブラボー券の引き換え所〉はあったが、気づかない人も多かったろう。資料代の配布は2日目の午後である。しかも、全員にブラボー券が配布されたわけでない。おそるおそるとやっていた。やっぱり、気持ちの中では盛り上がっていても、不安だった。強いことを直接言われたらくじけてしまう。だから、大会が始まってもきちんと説明していなかった。これは反省。

## ● ブラボー券の性格は

結局、ブラボー券とは、〈資料代〉でもあり、〈売り場用の金券〉でもあり、〈参加費の還元〉でもある。しかし、一番の性格は〈大会の中で互いに評価し合う活動〉である。

気楽に「いいね」を伝える物として位置づけてもらえるとうれしい。

## ◎ その他 **web ページの開設について**

無料ホームページ開設のサービスとして fc2 を利用した。ちなみに開設したのは 2015/7/30・・・つまり、東京下町大会終了の翌日にはもう準備した。科学の碑記念会館でも web ページを作っていたがそれは nifty のサービスだった。

fc2 の良いところは〈作成のための雛形があること〉と〈インターネット上で作成ができるので、登録するためのソフトがいらないこと〉だった。ホームページビルダーのような web ページ作成用のソフトを持っていない自分にとって有り難かった。そのため、科学の碑記念会館の web ページよりもきれいなものができていた。

ぼんやりと〈web ページにはチラシ的なものを載せたい〉と思っていた。広告と資料受け付け用の google フォームへのリンクが張れていれば良いと思っていた。そのため、リンクの張り方はぜひとも必要であった。これは html 辞典の本とかネットで検索すれば方法が出てくる。馬鹿の一つ覚えのようにコピーしてこれだけを活用した。

写真の掲載はできるけど、pdf の掲載はそのままでできなかった。pdf を jpg に変換する必要がある。ちょうど mac についているプレビューにその機能があったので助かった。

受け付け資料の公開については勤勉に web ページを更新していればできると思っていた。個人情報への配慮か

ら受け付け時に「氏」「名」を分けて登録してもらい、「氏」のみを掲載した。登録資料が増えるにつれ、分科会ごとに分類して掲載した。これも見ている人にとっては好評であった。〈事前に判ることがどれだけ有り難いのか〉は今回の伊香保大会では熱心に取り組んだことだ。そして、現在でも資料一覧や分科会報告が見られるようになっている。これなどは過去の大会にはなかったことだと思っている。

表形式の掲示の仕方は科学の碑記念会館の web ページで蔵書目録を作った経験が生きた。html 言語で表を書いていた。

大会終了後も開設の意義があると思っている。大会の報告として利用できる。そのため、ボクにも知らせてもらった分科会報告などは掲載してある。(だから、知らされていないものについては掲載できていません。昨年9月以降の更新がないのもそのためです)

facebook も開設した。こういう環境は人のつながりで利用される物だから、知らない人はまったく知らないことになる。時事的な話題は facebook で進行していた。

## ◎ ライブ中継について

以前にルネッサンス高校が関わっていた大会で〈ライブ中継をした〉と聞いていた。今は大会に参加してなくても、見るができるようになったのだと感心した。また、山口の大会でも入院中の板倉さんと会場を LINE でつないで見られるようにしていた。

そんなところから、ライブ中継も十分に気になっていた。(もっともこれは閉会行事に出たくなくて、〈別会場にいて見たかった〉と言う思いもある)

無料のライブ中継ができるものもいくつかあった。ボクは YouTube にした。YouTube ライブの欠点として〈完全なライブ中継でなく、時間差がある〉と紹介されていたが、それぐらいは気にならない。また、ライブ中継は〈ネットアドレスがあつていれば誰でも見られる〉と言う欠点もあった。しかし、そんなアドレスはそうそう一致するものではない。事前に関係者のみに通知しておけばほぼ個人情報の問題は大丈夫だろうと思った。

そのためのソフトはネットで検索して無料のフリーソフトを利用した。(Wirecast という物) Mac の内蔵カメラを使えば、そのままネット上に流すことはできた。しかし、内蔵カメラは自分の顔を映すには良いが広い会場を映すには向かない。ちょうど家庭にはデジタルビデオカメラがあつたので、これを利用しようとした。しかし、そのためにはカメラの信号をパソコンに取り込む必要がある。

Windows では製品が多いが、Mac では少ない。Mac で使えるビデオキャプチャーを購入した。心円祭は伊香保大会のプレ大会として位置づけて試してみた。

そのためには LAN ケーブルも 100～150 m 分購入することになった。お寺の母屋にはネット環境がなく、会館からケーブルを引く必要があった。

やってみると、パソコンの処理能力も必要になった。持ち運び優先の MacBook ではやっているうちに熱くなり、途中で止まってしまうようだった。そのため、大会では MacBook pro を使用した。

誰が見ているのか不安であった。でも、その後 3 人の人から「見ていたよ」と話してもらった。特に長崎の小川さんは「伊香保に来る途中のバスの中で全体会を見ていた」と言ってくれた。確かに事情で遅れてしまう人もいるわけだから、このようなサービスをして良かったと思っている。

素人でもライブ中継ができる環境になっているのに驚いている。手持ちのスマホでもできるものもあるだろう。自分にも出来たと言うのがちょっと信じられなかった。(それこそ学校行事で保護者全員が会場に入れられないものを中継することはできる)

## ◎ エプロンの作成

エプロンの作成については、伊香保大会の資料で川島さんの書いたのが詳しい。ベンチャー企業の気持ちを味わった。デザインや山猫マークのデータ利用では平野さんに大変お世話になりました。

## ◎ 大会記念品について

バッグの提案の他に構想していたものがある。

クリアファイルである。大量に作れば単価が安くなる。紙を挟むと隠れてしまう部分をうまく使えばおもしろい教材ができると考えていた。(例えば都道府県や九九など) うまく、教材になれば長期販売もできる。

しかし、そのための版を作るには鏡文字で準備しておかなければならない。いろいろ考えていたが、そこまでボクは用意できなかったのもこれは実現しなかった。そのうち、時間ができたら取り組んで見たい。